

夫婦関係が幼児期の父子関係イメージ・母子関係イメージ、 高校生の愛着スタイル、対人関係に及ぼす影響 —幼少期と高校時代についての大学生の回想から—

尾形 和男* 舟橋 真緒**

*学校教育講座 (心理学)

**小牧市立味岡中学校

A Research on the Influence which a Marital Relationship has on the Father-and-Child Relation Image and Mother-and-Child Relation Image of Infancy, a High School Student's Attachment Style, and Interpersonal Relations —From the Recollection about a College Student's Infancy and High School Days—

Kazuo OGATA* and Mao FUNAHASI**

*Department of School Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Komaki Municipal Ajioka Junior High School

問題と目的

子どもの精神的な発達に関連する重要な要因の一つとして、親子間に形成される愛着 (attachment) が指摘されている。人が特定の他者との間に形成する親密な情緒的結びつきのことであるが、愛着理論の提唱者である Bowlby (1973, 1982) は、「危機的な状況に際して、あるいは潜在的な危機に備えて特定の対象との接近を求め、またこれを維持しようとする個体の傾向である」として、子ども自らが安全性の確保を得ることがそもそも愛着行動の基本であると考えていた。この行動を生得的行動システム (愛着システム) として仮定し、このシステムにおいて早期 (乳児期・幼児期) の愛着対象者とのつながりが重要であり、パーソナリティや社会性、感情などに大きな影響をもたらすとしている。

愛着研究は SSP (Strange Situation Procedure) を開発した Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) によって進展を遂げることとなるが、母親との分離場面を通して測定される1歳児の行動から3タイプ (Aタイプ, Bタイプ, Cタイプ) の愛着行動を指摘した。しかし、実際問題この3タイプだけでは子どもの愛着行動を捉えきれないとする指摘があった (Lyons-Ruth & Jacobvitz, 1999; Solomon & George, 1999)。それは

SSPの母子再開場面で、親を受け入れると同時に顔がこわばったり、顔をそむけながら親に接近したり、突然予期できない行動を取るといった、親への接近と回避が混在するなど無秩序で奇妙な行動を取る子どもの存在 (Levy & Orlans, 1998) や、養育者への恐れや養育者の要求への過剰な服従を示すといった行動なども指摘されており (Zeanah & Boris, 2000)、これらを従来の3タイプに分類することが難しいとされ、Dタイプとして分類されることとなった (Main & Solomon, 1990)。

一方、愛着の形成とその変化に関しては、乳幼児期を中心として扱われている面が強かったが、Bowlby (1973, 1982) は人間が発達上自律性を獲得をした後でも形を変えて生涯を通して存続するものであると仮定している。

このような考えに基づいて青年期や成人期の愛着の個人差に関する研究が行われるようになってきている。それは大きくは2つの流れが確認できる。1つは成人愛着面接 (Adult Attachment Interview: AAI) によるものである。Main & Goldwyn (1984) による半構造化面接により4類型 (自律型, アタッチメント軽視型, とらわれ型, 未解決型) に分類する手法である。2つ目は Hazan & Shaver (1987) による愛着スタイルの質問紙 (Attachment Style Questionnaires) が挙げられる。こ

の質問紙は以後用いられることとなるが、そのような流れの中でも Bartholomew (1990) は Bowlby (1973) の考えである自己と他者に対する信頼感の高低に基づく内的作業モデル IWM (Internal Working Model) を安定型、とらわれ型、拒絶回避型、対人恐怖的回避型の4類型に分類した。

これらの類型化の特徴は、回避型として従来扱われてきたものを、拒絶回避型と対人恐怖的回避型の2類型に細分したことである。この理論に基づき、Brennan, Clark & Shaver (1998) は ECR 尺度 (the Experiences in Close Relationships inventory) を作成した。また、中尾・加藤 (2004) はそれを基に、一般他者に対する愛着スタイルを測定しようと考え、一般他者 ECR 尺度を作成している。愛着スタイルは成人でも測定できるものとして考えられ、今日においては精神機能の発達に関連する研究が継続されている。

その中でも、金政・大坊 (2003) は青年の愛着スタイルと社会的適応の関連性について3タイプの愛着行動に基づいて検討を加え、安定性の愛着スタイルが青年の精神的健康にプラスの影響を、不安定性に関して特にアンビバレントは社会的適応に負の影響を及ぼし、不安やうつそして親密な関係を取ることに自信の欠如につながることを示している。また、玉瀬・今村 (2006) は甘えと愛着の関係について検討を加え、安定型は「相互依存的甘え」と正の相関を示し、アンビバレント型は「屈折した甘え」と正の相関、また回避型は「相互依存的甘え」と正の相関を示すことを指摘している。つまり安定した正常な愛着関係は正常な甘えの発達に影響していることを示した。一方、豊田 (2014) は戸田 (1988) の作成した愛着スタイル測定尺度を用いて愛着スタイルと情動知能、自尊感情との関係について調べ、安定型得点は情動知能、情動の認識と理解、情動の制御と調整の各機能と正の相関があり、アンビバレント型は負の相関、回避型は無相関であることを指摘した。

成人の愛着スタイル4類型を用いた研究に関しは、村木・岡島・桂田 (2012) は成人愛着スタイルと自立との関連性について青年男女に検討を加え、安定型は拒絶型、とらわれ型および恐れ型よりも自立得点が高いことを明らかにした。また、越智・佐藤 (2013) も女子学生の愛着スタイルと学校適応感について検討を加え、安定型の愛着スタイルは学校適応感と自尊感情が恐れ型よりも有意に高い値を示したことを報告している。以上の一連の報告から、安定型の愛着スタイルは他のスタイルよりも概して子どもの発達・適応に正の影響をもたらすことが示されている。これに関連して、成人の愛着スタイルの形成の基礎と考えられる家庭内の母親の養育態度との関連性について取り上げた報告があり、幼少期の母親との関係について、多くの養育を受けた場合には「安定型」の愛着スタイルが示さ

れたとしている (青柳・酒井, 1997; 瀧川, 2003; 福井・河合, 2006)。また、Mikulincer, Florian & Tolmacz (1990) や Mikulincer & Nachshon (1991) は成人の愛着スタイルは母親に対する印象と関連することを指摘した。このように、幼少期の親子関係が成人の愛着スタイル形成に及ぼす影響についても検討が進められて来ており、その関連性も確認されてきている。

しかし、上記に示すように、幼児期の親子関係が成人の愛着スタイル形成に影響を及ぼし、そのことが現在の行動様式に影響を及ぼすと考えられるが、愛着スタイル形成に関わる親子関係の在り方に関する研究と、愛着スタイルと青年の行動との関連性についての研究が詳細にそして慎重に進められているもののそれぞれ別々に行われる傾向があり、親子関係の在り方と愛着スタイルと成人の行動についての一連の関連性についての研究は数少ない。本来的には、愛着理論は親子関係に基づいて形成される愛着関係が成人の行動に影響をもたらすと考えており、この流れに基づいた検討も必要である。これに関して、寺田・岩淵 (2008) は幼少期から青年期への一連の流れの視点に基づいた検討を加え、幼少期の愛着が愛着スタイルの「見捨てられ不安」「親密性の回避」それぞれに影響をもたらし、それが子どもの自尊心に影響していることを指摘している。

また、幼児期の親子関係に関する視点として母親を中心とする検討が多く、父親を取りあげたものは少ないことも指摘できる。とりわけ、愛着関係については Lamb (1975) が指摘して以来、父親の重要性が改めて確認されてはいるものの、愛着スタイルについて父親の養育の視点から取り上げられた研究は多くは見られない。この視点は最近父親の育児参加が進行して来ており、父子関係において子どもに形成される愛着が成人期の愛着スタイルに及ぼす影響については現実的な観点から検討が求められる。

さらに、親子間の愛着関係の在り方については従来母子関係を中心として母親の影響力を主として扱ってきている。しかし、母親と子どもとの間に形成される愛着関係は母親のみの影響力とは言い切れない。それは、家庭内の人間関係が間接的に母親に影響を及ぼしているからである。これは家族をシステムとして捉える立場であり、尾形・宮下 (2003) は幼児の子育てを行っている夫婦への調査から、夫の家庭への協力的関わりが妻のストレスを減少させ、子どもに対する威圧的態度、拒否的態度、親和的態度に影響することを指摘している。このような夫婦間の在り方は子育てのための重要な要素として指摘されている (例えば、平山, 2001; Flouri & Buchanan, 2003; 大島, 2009)。

本研究は、以上の視点から高校生の愛着スタイルを取りあげたことを明らかにすることを目的とする。

高校生の対人関係は幼少期における父親と母親の夫

夫婦関係の在り方に基づいて親子間の愛着関係が形成され、そして間接的に愛着スタイル形成も影響を受け、さらにそれに基づいて影響を受けていると考えられる。このような視点に基づいて下記に示すモデル図の検討を探索的に行うことである。

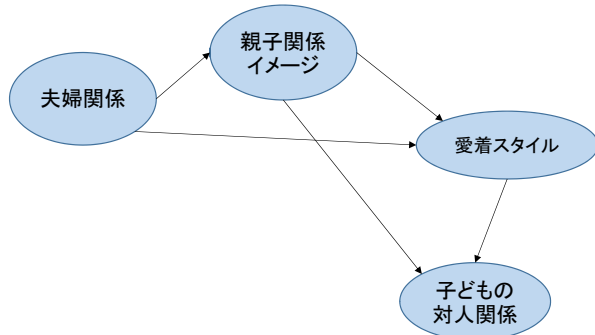


Figure 1 モデル図

方法

1. 調査対象者

愛知県の某大学学生262名(男子学生125名、女子学生137名)。平均年齢19.23歳 (SD=0.84, range: 18~23歳)。

2. 調査時期

2014年9~10月。

3. 調査用紙

(1) 幼少期の母子関係イメージを測定する質問紙

幼少期の母親との関係を調べるための、幼少期の母子関係イメージ尺度(酒井, 2001) 16項目。

(2) 幼少期の父子関係イメージを測定する質問紙

幼少期の母親との関係を調べるための、幼少期の父子関係イメージ尺度(酒井, 2001) 16項目。

(3) 夫婦関係満足度を測定する質問紙

子どもから見た夫婦関係の状況を測定するための質問紙(諸井, 1997) 6項目。

(4) 高校時代の愛着スタイルを測定する質問紙

高校時代の愛着スタイルを測定するための、一般他者版ECR尺度(中尾・加藤, 2004) 36項目。

(5) 高校時代の教師との関係と友人との関係を測定する質問紙

高校時代の教師や友人との関係、クラスやクラブ活動での集団活動の状況を調べるための高校生用学校環境適応尺度(内藤・浅川・高瀬・古川・小泉, 1986) 15項目。(1)~(5)の各質問紙については個人を特定して調べるものではなく、全体の傾向を見ることを説明のうえ無理のない範囲で回答してもらった。

結果

1. 質問紙の構造化

本研究で用いた質問紙がどのような構造から成っているのかを明らかにするために、それぞれの質問紙に因子分析を行った(主因子法, Promax回転)。

(1) 幼少期の母子関係イメージを測定する質問紙

幼少期の母子関係イメージを調べる質問紙(16項目)について因子分析を実施した。因子負荷量.40以上の項目を基準にして、2因子を抽出した。第1因子は項目14(私は親の愛情が薄いと思ったことがあった。逆転項目)、項目5(いつか見捨てられるのではないかと思った。逆転項目)、項目8(私が泣いていても、親は関心がなかった。逆転項目)などの負荷が高く、母親との心理的近さを示しているので「安定的母子関係」と命名した。第2因子は項目6(親がそばにいないと眠れなかった。), 項目15(親戚の家に遊びに行っても、親がいないと怖かった。), 項目9(幼稚園〈保育園〉に行っても、親を思い泣いた。))などの負荷が高く、親から心理的に分離が出来ず依存している状況を示しているため「依存的母子関係」と命名した。また各因子の α 係数を算出したところそれぞれ、.87, .60であった(Table 1参照)。

(2) 幼少期の父子関係イメージを測定する質問紙

幼少期の父子関係イメージを調べる質問紙(16項目)について因子分析を実施した。因子負荷量.35以上の項目を基準にして、2因子を抽出した。第1因子は項目14(私は親の愛情が薄いと思ったことがあった。逆転項目)、項目5(いつか見捨てられるのではないかと思った。逆転項目)、項目8(私が泣いていても、親は関心がなかった。逆転項目)などの負荷が高く、父親との心理的近さを示しているため「安定的父子関係」と命名した。第2因子は項目6(親がそばにいないと眠れなかった。), 項目15(親戚の家に遊びに行っても、親がいないと怖かった。), 項目13(親と出かけるのが好きだった)などの負荷が高く、親から心理的に分離が出来ず依存している状況を示しているため「依存的父子関係」と命名した。また各因子の α 係数を算出したところそれぞれ、.84, .66であった(Table 2参照)。

(3) 夫婦関係満足度を測定する質問紙

この質問紙は6項目からなっているが、単因子構造であることが確認されたので6項目の下位尺度平均得点を求めた。また、この尺度は次の6項目からなる。

①父親と母親は申し分のない結婚生活を送っていた。②父親と母親の関係は非常に安定していた。③父親と母親の関係は強固であった。④二人の関係によって、父親と母親はそれぞれ幸福であるように見えた。⑤父親と母親はまるで同じチームの一員のようにあった。⑥二人の関係のあらゆるものを思い浮かべると、父親と母親は幸福な夫婦であった。6項目の α 係数

は.96であった。

(4) 愛着スタイルを測定する質問紙

成人の愛着スタイルを測定する質問紙 (ECR) は既に多くの研究で用いられているが、本研究では精度を確保するために因子分析を行った。その結果、2因子が抽出された。第1因子は項目14 (私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配した。)、項目8 (私は、知り合いを失うのではないかとけっこう心配していた。)、項目6 (私が人のことを大切に思うほどには、人は私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配した。))などの負荷が高く、周囲の人との関係

がうまく取れない心配をしているので、「見捨てられ不安」と命名した。また、第2因子は項目9 (私は、人に心を開くことに抵抗を感じた。逆転項目)、項目25 (私は、人に何でも話した。)、項目17 (私は人とあまり親密にならないようにしていた。逆転項目) などの負荷が高く、人との関わりを求める姿勢を示すので「親密性希求」と命名した。2因子 α 係数は順に、.91、.83であり高い信頼性が確認された (Table 3参照)。

(5) 高校時代の教師・友人との関係などを測定する質問紙

高校時代に学校で友人や教師とどのような関係を

Table 1 母子関係イメージについての因子分析結果 (主因子法 Promax回転後)

項 目	F1	F2
安定した母子関係 ($\alpha = .87$)		
14. 私は親の愛情が薄いと思ったことがあった。	.863	-.243
8. 私が泣いていても、親は関心がなかった。	.754	-.111
5. いつか見捨てられるのではないかと心配した。	.713	-.322
1. 私は親が好きだった。	.673	.091
11. 助けてほしい時に、親は助けてくれないことがあった。	.650	-.107
16. 私はよく親に、褒められた。	.524	.127
13. 親と出かけるのが好きだった。	.507	.346
7. 私は親のそばは安心感があった。	.499	.359
10. 親と遊ぶのが楽しかった。	.494	.233
4. 私は親が何をしても、それに関心がなかった。	.443	.246
依存的母子関係 ($\alpha = .60$)		
6. 親がそばにいないと夜眠れなかった。	-.061	.566
15. 親戚の家に行っても、親がいないと怖かった。	-.158	.564
9. 幼稚園 (保育園) に行っても、親を思い出してずっと泣いていたことがあった。	-.119	.459
3. 親が出かける時は、無理やりついでにこうとした。	-.014	.455
因子相関	F1	.516
	F2	

(項目番号のアンダーラインは逆転項目)

Table 2 父子関係イメージについての因子分析結果 (主因子法 Promax回転後)

項 目	F1	F2
安定した父子関係 ($\alpha = .84$)		
14. 私は親の愛情が薄いと思ったことがあった。	.811	-.148
5. いつか見捨てられるのではないかと心配した。	.799	-.384
8. 私が泣いていても、親は関心がなかった。	.758	-.087
11. 助けてほしい時に、親は助けてくれないことがあった。	.720	-.200
1. 私は親が好きだった。	.557	.254
16. 私はよく親に、褒められた。	.550	-.004
4. 私は親が何をしても、それに関心がなかった。	.437	.231
依存的父子関係 ($\alpha = .66$)		
6. 親がそばにいないと夜眠れなかった。	-.219	.582
15. 親戚の家に行っても、親がいないと怖かった。	-.194	.557
13. 親と出かけるのが好きだった。	.375	.524
3. 親が出かける時は、無理やりついでにこうとした。	-.048	.471
10. 親と遊ぶのが楽しかった。	.374	.442
9. 幼稚園 (保育園) に行っても、親を思い出してずっと泣いていたことがあった。	-.109	.384
因子相関	F1	.593
	F2	

(項目番号のアンダーラインは逆転項目)

取っているのか、また部活動などの集団活動との関わりを調べるための質問紙（15項目）に因子分析を行った。その結果3因子が抽出された。第1因子は項目19（私は先生と話そうとしていた。）、項目6（友達のように親しみを感じる先生がいた。）、項目10（なんでも相談できる先生がいた）などの負荷が高い。これらの項目は教師との間に信頼に基づくつながりがあると考えられるので「教師との信頼関係」と命名した。また、第2因子は項目9（私は明るい性格だった。）、項目16（私は、人あたりが良く社交的であった。）、項目8（私は多くの友人を持っている）などの負荷が高く、友人

との良好な関係形成を示している。「友人との良好な関係」と命名した。さらに、集団行動については、項目3（部活、クラスの活動に積極的に参加していた）、項目18（部活に所属し、充実していた）、項目12（部活やH.R.活動、行事が楽しかった）などの負荷が高く、集団としての活動への参加を示している。「集団活動への参加」と命名した。また、3因子それぞれの α 係数は順に、.84、.85、.84、であり高い信頼性が確認された（Table 4参照）。

Table 3 一般他者ECRの因子分析結果（主因子法 Promax回転後）

	F1	F2
見捨てられ不安 ($\alpha = .91$)		
14. 私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配した。	.748	-.024
8. 私は知り合いを失うのではないかとけっこう心配していた。	.681	-.161
6. 私が人のことを大切に思うほどには、人は私のことを大切に思っていないのではないかと心配した。	.636	-.201
12. 私は、そばにいてほしいと望むぐらいに人がそばにいてくれないとイライラした。	.633	.059
10. 私はいつも人が私に対して抱いている気持ちが、自分に対して人が抱いている気持ちと同じくらい強ければいいのになあと思っていた。	.633	.129
16. 私がとても親切になりたいと強く望むがために、ときどき人はうんざりして私からはなれていってしまった。	.605	-.019
22. 私は、（知り合いに）見捨てられてしまうのではないかと心配になることは、ほとんどなかった。	.605	-.152
24. 私は、人に自分のことを好きになってもらえなかったら、きっと気が動転して悲しくなったり腹が立ったりしただろう。	.593	.204
18. 私は、人が私に対して好意的だということを何度も何度も言ってくれることが必要だった。	.592	-.114
2. 私は見捨てられるのではないかと心配になった。	.581	-.130
4. 私は、いろいろに人との関係について非常に心配していた。	.546	-.038
35. 私は、慰めや励ましなど、いろいろなことで助けを求めている。	.539	.275
28. 私は誰かと付き合っていないと何となく不安で、不安定な気持ちになった。	.536	.270
32. 私は、人が必要な時にいつでも私のためにいてくれないとイライラした。	.536	.142
34. 人にダメだと言われると、自分は本当にダメだと思った。	.533	-.068
36. 私は、知り合いが私のことをほっといて自分一人で何かをすることが重なってくると、腹が立った。	.517	.185
20. 私はときどき、人に自分の感情や自分たちの関係に真剣であることを示させようとしている、と感じた。	.510	.182
30. 私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるがために、ときどき人はうんざりして私から離れて行ってしまった。	.506	.027
26. 私が親密になりたいと思うほどには、人は私と親密になりたいと思っていないだろうと思っていた。	.468	-.210
11. 私は、人と親密になりたいと思うが、いつの間にかいつい後ずさりしていることが多かった。	.426	-.336
親密性希求 ($\alpha = .83$)		
9. 私は、人に心を開くことに抵抗を感じた。	-.252	.699
25. 私は、人に何でも話した。	.236	.660
17. 私は人とあまり親密にならないようにしていた。	-.045	.623
15. 私は、心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がなかった。	.048	.604
23. 私は、人とあまり親密になるのはどちらかというとき好きではなかった。	.038	.602
1. 私は、心の奥底で何を感じているかを人に見せるのは、どちらかというとき好きではなかった。	-.027	.542
27. 私はたいてい、人と自分の問題や心配事を話し合った。	.297	.526
3. 私は人と親密になることがとても心地よかった。	.134	.497
29. 私は人に頼ることに抵抗がなかった。	-.032	.461
31. 私は、人に慰めやアドバイス、助けを求めることに抵抗がなかった。	.170	.456
7. 私は、人が自分に対して非常に親密になりたがってくると、いごち悪く感じた。	-.128	.407
5. 人が私と親密になろうとするやいなや、私はその人から距離を取ろうとしている自分に気づいた。	-.245	.406
因子相関	F1	-.185
	F2	

（項目番号のアンダーラインは逆転項目）

2. 夫婦関係と親子関係イメージの関連性について

本研究で使用する夫婦関係に関する調査用紙は家庭内の子育ての環境を調べるために使用するためのものであり、子育てのための環境がどの程度整っているかを把握するものである。質問紙の内容は現在の夫婦関係のみならず子どもの幼少期からの関係の積み重ねについて問う内容も含まれており、長い年月の夫婦関係の状況を見る内容になっている。しかし、夫婦関係が子どもの幼少期の状況がある程度反映していることが想定される。したがって、夫婦関係と高校生の把握する幼少期を中心とする親子関係イメージとの間に関連性があることが予想されるので、夫婦関係と親子関係イメージについてピアソンの積率相関係数を求めた。ここでは、親子関係イメージを測定する項目を父親と母親別々に算出した。

その結果Table 5に示すように、夫婦関係の良好性は父子関係イメージ、母子関係イメージ両方ともに1%水準で有意な相関があることが確認された。

3. 夫婦関係と親子関係イメージ、愛着スタイル、対人行動との関連

次に、夫婦関係を基にして、親子関係イメージ、愛着スタイル、対人関係に及ぼす影響を検討するために、父子関係、母子関係それぞれにパス解析を行った。結果は標準編回帰係数が有意な（傾向も含む）ものだけ記載した。

(1) 父子関係の場合

Figure 2に示すように、父親の場合には夫婦関係から親子関係イメージの「安定的父子関係」「依存的父子関係」に有意な正のパスが示された。「安定的父子関係」からは愛着スタイルの構成要素である「見捨てられ不安」に有意な負のパスが示され、そこから対人関係の「友人との良好な関係」に有意な負のパスが確認された。また、対人関係の「集団活動への参加」に直接有意な正のパスが確認された。一方、「依存的父子関係」から「親密性希求」に正のパス（傾向）が示され、そこから「友人との良好な関係」「教師との信頼関係」「集団活動への参加」に有意な正のパスが確認された。

Table 4 生徒の対人関係・集団関係の因子分析結果（主因子法 Promax回転後）

	F1	F2	F3
教師との信頼関係 ($\alpha = .84$)			
15. 私は先生と話そうとしていた。	.810	-.042	.003
4. 友達のように親しみを感じる先生がいた。	.795	-.132	-.006
1. 私は、学校の先生と気楽に気軽に話すことができた。	.757	.035	-.064
8. 何でも相談できる先生がいた。	.740	-.023	.016
13. 私は、先生によく質問していた。	.559	.133	-.073
友人との良好な関係 ($\alpha = .85$)			
7. 私は明るい性格だった。	-.028	.921	-.069
12. 私は、人当たりがよく社交的だった。	.024	.801	-.095
6. 私は多くの友人を持っていた。	.036	.757	.062
10. 私はユーモアを持っていた。	-.098	.690	.005
集団活動への参加 ($\alpha = .84$)			
2. 部活、クラスの活動には積極的に参加していた。	-.069	-.092	.940
14. 部活動に所属し、充実していた。	-.102	-.139	.762
9. 部活動やH.R.活動、行事が楽しかった。	.041	.161	.617
5. H.R.活動や学校行事には協力的だった。	.248	.130	.518
11. H.R.活動や行事に自主的に参加していた。	.098	.225	.492
因子相関	F1	.524	.473
	F2		.526
	F3		

Table 5 夫婦関係と父子・母子関係イメージの相関

	夫婦関係	父子関係イメージ	母子関係イメージ
夫婦関係			
父子関係イメージ	.345**		
母子関係イメージ	.275**	.784**	

** $p < .01$

この結果から「安定的父子関係」は「見捨てられ不安」を低めることによって「友人との良好な関係」を高めること、「集団活動への参加」に直接プラスの影響もたらすことが示された。また、「依存的父子関係」は「親密性希求」を高めることによって「友人との良好な関係」「教師との信頼関係」「集団活動への参加」を高めることが示された。その一方で「見捨てられ不安」を高め「友人との良好な関係」を低めることも示された。以上のように、父親の場合には夫婦関係から親子関係イメージ、愛着スタイル、対人行動それぞれへパスが示され、愛着形成の基本としての家庭環境が影響していることが示された。

(2) 母子関係の場合

次に母親についてはFigure 3に示すように、夫婦関係からは親子関係イメージの「安定的母子関係」にのみ有意な正のパスが示された。また、「依存的母子関係」へは有意ではないものの、負のパスが示された。この結果については父子関係との対比のために参考と

して記載した。

「安定的母子関係」から愛着スタイルの構成要素である「親密性希求」に有意な正のパスが、「見捨てられ不安」には有意な負のパスが確認された。対人関係の「集団活動への参加」に直接有意な正のパスが確認された。また、「親密性希求」からは対人関係の「友人との良好な関係」「教師との信頼関係」「集団活動への参加」それぞれに有意な正のパスが示された。一方、「見捨てられ不安」から「友人との良好な関係」へ有意な負のパスが確認された。

以上のように、母親の場合、夫婦関係の良好性は「安定的母子関係」に影響を及ぼし、それが愛着関係と対人行動に間接的に影響を及ぼしていることが示唆された。特に、「安定的母子関係」は「見捨てられ不安」を低め、結果として「友人との良好な関係」を高めることが示され、さらに「親密性希求」を高め「友人との良好な関係」「教師の信頼関係」「集団活動への参加」を高め、対人関係にプラスの影響をもたらすことが示

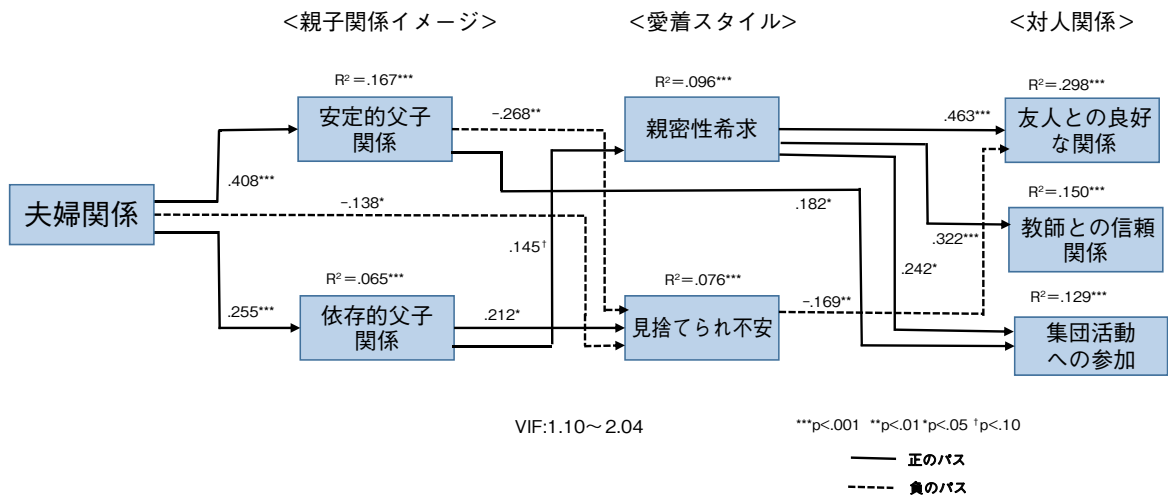


Figure 2 夫婦関係と父子関係・愛着スタイルと対人関係のパスダイアグラム

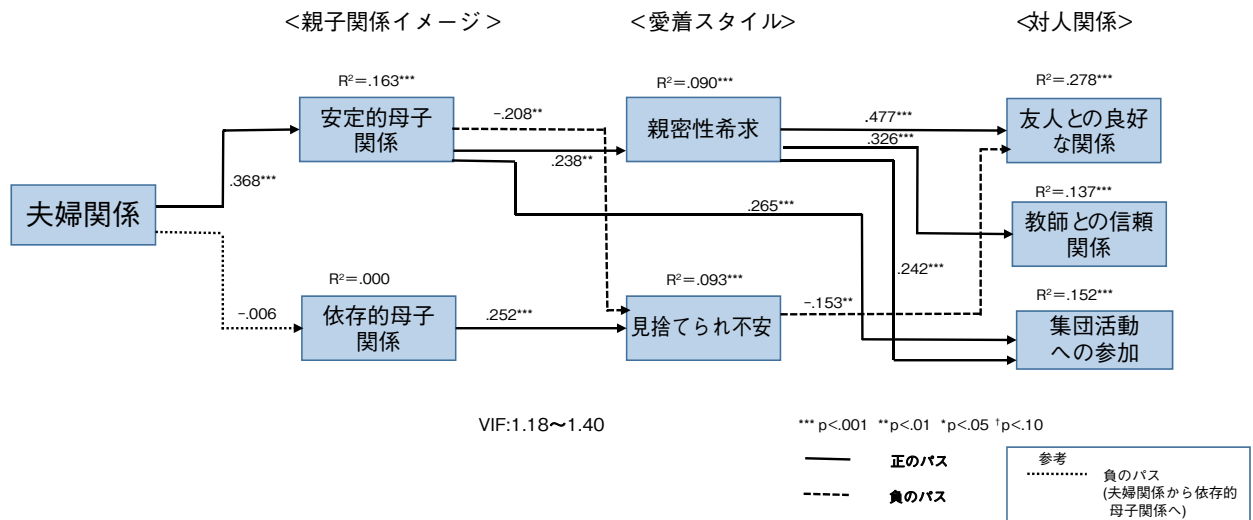


Figure 3 夫婦関係と母子関係・愛着スタイルと対人関係のパスダイアグラム

唆された。また、夫婦関係の良好性は有意な結果ではないものの「依存的母子関係」を減少させる方向で機能していることも示唆されたと考えられる。このように、夫婦関係の良好性は母子関係を促進する方向で影響していることが示された。

考察

まず、仮説として取り上げたモデル図について、母親の場合夫婦関係から親子関係イメージの「依存的母子関係」へパスが見られず、父親については「安定的父子関係」から愛着スタイルの要素である「親密性希求」にパスが見られなかった。しかし、概して「夫婦関係」→「親子関係イメージ」→「愛着スタイル」→「高校生の対人行動」の基本的流れは確認されたと考える。この結果は、幼少期の愛着が愛着スタイルの「見捨てられ不安」「親密性の回避」それぞれに影響をもたらし、結果として子どもの自尊心に影響しているとした寺田・岩淵（2008）の結果を支持するものである。

また、幼少期の親子関係メージは幼少期の現実の親子関係の在り方によって規定される側面が強いが、その親子関係の状況に影響を与えると考えられる夫婦関係は、本研究の結果から安定度の高い基盤変数として存在するとも考えられる。

さらに、この夫婦関係に関して、父親の場合に「安定的父子関係」が形成されることによって「見捨てられ不安」を軽減し、「友人との良好な関係」の形成に影響すること、また「依存的父子関係」を形成することによって「親密性希求」を増加させ、そのことが友人、教師、集団活動との関係にプラスの方向で作用することが示されるものの、「依存的父子関係」は「見捨てられ不安」を高めて友人関係に負の影響を及ぼすことも示され、「依存的父子関係」は子どもとの間に不安定な要素を含む関係であると考えられる。

母親については、夫婦関係の良好性は「安定的母子関係」を形成し、それが愛着スタイルの構成要素である「親密性希求」「見捨てられ不安」を介して子どもの対人関係にプラスの影響を持つことも示され、「親密性希求」には父親以上に「安定的母子関係」が影響力を持つことが示されたと考えられる。一方、「依存的母子関係」については本研究から夫婦関係からの有意なパスが示されなかったものの、夫婦関係の良好性は「依存的母子関係」を弱める方向で作用していることが示唆される。このことについてはさらに検討を加える必要がある。

今回取り上げた夫婦関係に関して、父親と母親の「依存的な父子関係」と「依存的な母子関係」において機能的な相違が見られた。父親では夫婦関係から正のパスが見られたのに対して母親では確認されなかったが、この結果は父親と母親の子どもに対する姿勢の

違いを反映したものとも考えられる。母親の場合夫婦関係が良好であるほどストレスが軽減し、子どもとの関係が良好になるとの指摘（尾形・宮下，2000；平山，2001）にもあるように、夫婦関係が良好な場合には精神的にも落ち着いて子どもと関わる事が可能であり、それだけ子どもが母親を求めて後を追うようなことが減少すると考えられる。したがって、夫婦関係の良好性は良好な親子関係に基づく「安定的母子関係」を強める方向に作用するものと思われる。これに対して父親の場合には、夫婦関係の良好性は「安定的父子関係」「依存的父子関係」両方に正の影響を及ぼしている。これは良好な親子関係が展開される反面、子どもは父親との関係に物足りなさを感じたり不安を感じたりすることもあり、全体として起伏の多い親子関係が展開されていることを示した結果とも受け取れ、母親と父親の親子関係の在り方の相違を示したものとも考えられる。

また、父親・母親に共通していることとして、愛着スタイルの構成要素である「親密性希求」は「見捨てられ不安」以上に子どもの対人関係に正の影響をもたらしていることが指摘できる。「親密性希求」は本来IWMの対人関係に関する要素であり、安定した親子関係は「親密性希求」が高く、愛着スタイルにも積極な影響を及ぼすことが十分に推測される。「親密性希求」が高い愛着スタイルは「安定型」「とらわれ型」の2つであるが、「安定型」の愛着スタイルを持つ場合には、発達適応が良好であることを指摘する報告が多い。越智・佐藤（2013）は女子学生の愛着スタイルと学校適応感について検討を加え、安定型の愛着スタイルは学校適応感が恐れ型よりも高いことを指摘しているが、本研究も同様の結果を示している。

概して「親密性希求」を含む「安定型」が発達上プラスの影響を持つことについてはいろいろと検討が加えられている。「安定型」は他者との親密な関係の重要性を認識し、自己の独立性と自律性を重視する（松下・岡林，2009）とする指摘、また恋愛関係において相手に対して信頼や友情を感じやすい傾向がある（Hazan & Shaver, 1987）こと、さらに自己開示の程度が高く、柔軟で適切な開示を行う傾向がある（Pietromonaco & Barrett, 1997）こと、そして「安定型」や「アンビバレント」な人は親密な異性への愛情の程度が高い（金政・大坊，2002a）こと、安定型の愛着スタイルは愛情と正の関連性を有する（金政・大坊，2002a; Simpson, 1990）ことが報告されている。これらの報告は共通して「安定型」の愛着スタイルは、対人関係において相手との関係を良好にするための情緒的な機能を有していることを指摘しており、情緒が媒介となって対人関係の良好性を形成しているとも考えられる。本研究で扱った「友人との良好な関係」「教師への信頼関係」「集団活動への参加」を促進する「親密性希求」に関して

も、同様に情緒的な機能が要因の一つとして影響していることは十分に推測できることである。

本研究は、幼少期の親子関係イメージを基に、そこから形成されると考えられる愛着スタイルが青年の対人行動に及ぼす影響について探索的に検討を加えた。その際に子どもへの対応を左右すると考えられる夫婦関係を基盤に置いた。得られた結果は青年の対人関係に及ぼす要因を検討する上で示唆に富むものであるが、中学時代や高校時代における先生や友人との出会いによってIWMが変化しうること、しかも重要他者として「前向きな存在」「自己受容」を得られるような他者は親密性の回避を低下させ、人間不信を感じる他者との出会いは「見捨てられ不安」や「親密性の回避」を高める(内田, 2014)とする指摘もある。高校生になるまでの10年以上の長い期間を考えた時、生活の年数と同時に発達の各段階において多くのライフイベント、重要他者からの影響などを含めた他の変数も十分検討することが必要である。

また、今回測定した夫婦関係については被調査者が大学生であり、全体的には両親の夫婦としてのまとめりや状況を把握することは十分できると考えられる。しかし、質問項目の内容が夫婦関係一般について扱っているため、幼少期の夫婦関係に関する内容が不足していることも指摘できる。さらに、高校生の遡及的な視点から回想による部分が多いことから、夫婦関係の状態を捉えるために現在から過去の様子まで広い期間を振り返って検討することが求められ、被調査者によっては時期的な相違がかなりあったとも推測される。したがって、今後一定の期間に絞って夫婦関係を調べる必要がある。同時に、質問項目の検討を一方でインタビューなどにより詳細に把握する手法も求められる。さらに、「親密性希求」が対人関係を中心とする子どもの発達にもたらす機能についても、親子間に展開される情緒的な面も含めてさらに検討が必要と考える。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. 1978 Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 青柳肇・酒井厚 1997 アダルト・アタッチメントと回想による幼少期のアタッチメントとの関係 早稲田大学人間科学研究, 1, 7-16.
- Bartholomew, K. 1990 Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss: Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1982 *Attachment and loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W.S.Rholes (Eds.), *Attachment Theory and Close Relationships* (pp. 46-76). New York: Guilford Press.
- Flouri, E., & Buchanan, A. 2003 The role of father's involvement in children's later mental health. *Journal of Adolescence*, 26, 63-78.
- 福井義一・河合美奈子 2006 成人愛着スタイルと回顧された両親の養育態度の関連 日本心理学会第70回大会発表論文集, 163.
- Hazan, C. & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52 (3), 511-524.
- 平山聡子 2001 中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連—父母評定の一致度からの検討— 発達心理学研究, 12, 99-109.
- 金政祐司・大坊郁夫 2002a 青年期の愛着スタイルと恋愛へのイメージ—青年期の愛着スタイルと親密な異性関係 (1)— 日本心理学会第66回大会発表論文集, 187.
- 金政祐司・大坊郁夫 2003 青年期の愛着スタイルと社会的適応性 心理学研究, 74, 466-473.
- 越智幸一・佐藤貴虎 2013 シャイな女子学生における愛着スタイルと学校適応感との関連 日本発達心理学会第24回大会発表論文集, 194.
- Lamb, M. 1975 Fathers: Forgotten contributors to child development. *Human Development*, 18, 245-266.
- Levy, T. M. & Orlans, M. 1998. *Attachment, Trauma, and Healing: Understanding and Treating Attachment Disorder in Children and Families*. CWLA Press.
- Lyons-Ruth, K. & Jacobvitz, D. 1999 *Attachment disorganization: Unresolved loss, relational violence, and lapses in behavioral and attentional strategies*. Guilford Press.
- Main, M. & Goldwyn, R. 1984 Predicting rejection of her infant from mother's representation of her own experiences: A preliminary report. *Monograph of the International Journal of Child Abuse and Neglect*, 8, 203-217.
- Main, M. & Solomon, J. 1990 Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth Strange Situation. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years: Theory, research, and intervention* (pp. 121-160). Chicago: University of Chicago Press.
- 松下姫歌・岡林睦美 2009 青年期における愛着スタイルと母子イメージとの関連 —質問紙と母子画を用いての検討— 広島大学心理学研究, 9, 191-206.
- Mikulincer, M., Florian, V., & Tolmacz, R. 1990 Attachment styles and fear of personal death: A case study of affect regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 273-280.
- Mikulincer, M., & Nachshon, O. 1991 Attachment style and patterns of self-disclosure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 321-331.
- 諸井克英 1997 子どもの眼からみた家庭内労働の分担の衡平性 —女子学生の場合— 家族心理学研究, 11, 69-81.
- 村木佑実子・岡島泰三・桂田恵美子 2012 青年期の愛着スタイルと自立との関連 関西学院大学 臨床教育心理学研究, 38, 33-38.
- 内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三 1986 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要 第1分冊, 学校教育・幼児教育・障害児教育, 7, 135-146.
- 中尾達馬・加藤和生 2004 “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5,

19-27.

- 尾形和男・宮下一博 2003 母親の養育行動に及ぼす要因の検討—父親の協力的関わりに基づく夫婦関係, 母親のストレスを中心に— 千葉大学教育学部研究紀要, **50**, 5-15.
- 大島聖美 2009 妻から夫への信頼感が青年期後半の心理的健康に与える影響 発達心理学研究, **20** (4), 351-361.
- Pietromonaco, P. R. & Barrett, L. F. 1997 Working models of attachment and daily social interactions. *Journal of Personality and Social psychology*, **73**, 1409-1423.
- 酒井厚 2001 青年期の愛着関係と就学前の母子関係-内的作業モデル作成の試み- 性格心理学研究, **9**, 59-70.
- Simpson, J.A. 1990 Influence of Attachment Styles On Romantic Relationship. *Journal of Personality and Social psychology*, **59**, 971-981.
- Solomon, J. & George, C. 1999 *Attachment disorganization*. New York: Guilford Publications.
- 瀧川由美子 2003 幼少期の愛着形成が青年期に与える影響について—幼少期の愛着の連続性から考える— 奈良文化女子短期大学紀要, **34**, 41-47.
- 玉瀬耕治・今村友美 2006 「甘え」と愛着(愛着) 教育実践総合研究センター紀要, **15**, 39-46.
- 寺田香葉・岩淵千明 2008 親への愛着及び愛着スタイルが自尊心に与える影響に関する研究 日本心理学会第72回大会発表論文集, **142**.
- 戸田弘二 1988 青年後期における基本的対人態度と愛着スタイル—作業仮説(working models)からの検討—日本心理学会第52回大会発表論文集, **27**.
- 豊田弘司 2014 愛着スタイル、情動知能及び自尊感情の関係 奈良教育大学 教育実践開発研究センター紀要, **23**, 1-6.
- 内田利広 2014 内的作業モデルの児童期から青年期における変容:重要な他者という観点から 京都教育大学紀要, **125**, 117-130.
- Zeanah, C. H. & Boris, N. W. 2000 Disturbances and disorders of attachment in early childhood. In C. H.Zeanah (Ed.) *Handbook of infant mental health* 2nd. New York: Guilford Press (pp. 353-368).

(2015年9月15日受理)